

---

# ネガティブに行くぜ！

洸淋寺 凧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネガティブに行くぜ！

### 【Nコード】

N9447C

### 【作者名】

洸淋寺 凧

### 【あらすじ】

部活を辞めたい少年達男は、自殺<sup>フリ</sup>をしようとする。全ては部活を辞めるために・・・

八月××日、午後三時四十分に・・・・・・オレは自殺する！

\*

オレの家は、貧乏でなく、金持ちでもないという中途半端な位に立つ家であつた・・・・・・そんな家に仕立てたのは、父親だ！

オレの父親は、会社を持っている。ゴッドペーパー（神紙）なんて名前の、しゃれにしても面白くもなんともない広告代理店だ。父親は、毎日夜遅くまで働いているのだが、ちつとも会社は大きくならない。

そんな父親が、オレは嫌いだ・・・・・・いや、仕事の事はどうでもいいのだ。嫌いな理由は、別の所に有る。

「おい、達男！」目をつむるだけで、ある事に対する父親の叱り声が頭に反響する・・・・・・父親が、オレ叱る理由のある事とは「部活」である。

話すと長くなるが、まあ短く話そう。

オレの父親は小学校の頃入っていた少年野球チームの監督であつた。その時の父親は、失敗ばかりするオレに物凄い恐かつた・・・・・・それからオレは野球がどんどん嫌いになつていった・・・・・・そして時は経ち、オレは中学生になった。しかし父親の手が届かない中学校へ入った今も、オレは、野球をやめる選択権を得られなかつた。だか父親の手が届かない所へ入ったのは正解だつた。オレは毎日部活をさぼつた・・・・・・

そんなオレにも夢は有つた・・・・・・もちろんプロ野球選手や大リーガーなどという物ではない。

そしてオレの学校は、夢有学園といい、いかにも夢有りそうな、名前である……。そして、オレの夢は作家に成る事であった。だからオレは文芸部に入りたかった。しかしこの学校には文芸部は無い。最終手段で部活をつくろうと思ったのだが、最近部活をつくれるのは高校生だけということが分かった……

だからしかたがなく、嫌々野球部を続け、サボリ続けていたのだ。そう、オレが部活をサボルのは、全て学校が悪いのだ……。しかし最近ではばれるのは時間の問題であり、我慢の限界であった。

なのでオレは父親に野球部を辞めたいと告げた……。しかし父親は、ちゃんと頭を下げたオレをどやし、しまいには野球部を辞めるなら、学校も家の子も辞めると言い出した。

むかついたオレは、憂さ晴らしに友達に、メールした。

「今日ね、父親に部活辞めたいって言ったらさ、野球部辞めたいなら学校も家の子も辞めろって言われちゃった（、）もう本当でしょう（Ｔ・Ｔ）」と打った……。しかしメールは、なかなか帰って来ない。もう諦めて寝ようとした時、オレの携帯は鳴った。帰って来たメールは、結構長文だった……

「結局はお前が決めるんだよ。どんな選択をとつてもお前の頑張りでどうにでもなる。それと一つ聞くけど、お前自身野球をやつてて楽しいといえるのか？嫌嫌やつてるならヤメチマエ。辛いからだとか、ツマンナイからだとかいう中途半端なら辞めたほうがマシだよ。んまあ部活ごときで逃げてるようじゃこれから辛いことから逃げる人間になるんだね（、）最後に、親父さんにやらされてるとかじゃなくて、自分自身の為に野球を続ける！！っていう考え方してる達男のが好きだな俺は（、）んまあお前が結論だして親御さんに言え。納得してもらつまで頭下げ続けるんだよ。それくらい根性だせよな（。！。）漢だろ！！」……長かった。

アホか……。オレに頭下げろって？冗談じゃない。

どうせオレは逃げ続けますよ！自分の人生だ、自分で決める・  
・別にプロ野球選手になりたいわけじゃないんだ！なのに何故オ  
レが野球をしなくちゃいけない！ふざけるな・・・自分のため  
に野球をするオレの方が好き？別におまえに好きになってもらいた  
かねーよ！ていうかおまえも男だろって・・・

「・・・・・はぁ」思わずため息が出る。

もう本当にどうしようか・・・少なくともオレは部活よりも勉  
強の方が楽しい・・・普通は逆でなければならぬ物だ・・・  
しかしそんな事を父親に言った所で意味が無い。どうせあの人の事  
だ、

「俺だって学生の時は同じ気持ちだったよ」とか言って辞める事を  
許さない。なんと頑固な野郎だ。

話しは変わるが、人生がつまらなくなった人間や、人生から逃げ  
たくなった人間は、大体同じ行動をとる・・・・・もう少  
しで夏休みだ！そこでオレはある、プロジェクトを立てた。その名  
も、

「自殺に見せかけ未遂に終わり、自殺理由を野球部の事にして（ま、  
実際にも野球部のせいなんだが・・・）同情をかい、見事ハッピー  
エンドを迎えようプロジェクト！」という、名前だけで何をする  
のか分かる、長い長い名前だ！

まずはネットで親がいない時間を狙い、一番楽な、死に方を調べ  
た。何故一番楽な死に方なのかは、未遂に終わらせ、意識が戻った  
時に、どうして一番楽な死に方をしなかったのか聞かれるのが嫌だ  
ったし、死ぬつもりも無いのに苦しむのは嫌だったからだ・・・

二・三時間で、一番楽な死に方は、首吊りか一酸化炭素中毒らし  
い・・・一酸化炭素なら近くのホームセンターで練炭でも買えば  
いいから楽そうだ・・・でもなんだかそれだと本当に死んじや  
いそうで恐かった・・・オレは未遂に終わらせろんだ・・・  
死ぬんじゃない！ならば首吊り・・・この場合は、首を吊る  
紐をあらかじめ細く切っておけば実行の時にちょうど紐が切れてい

いだろう！

しかし本当に死んでしまったら結構大変だ・・・ネットに書いてあった物には、首吊りをする目や舌が飛び出るとあった・・・オレはそうなってしまうたオレを想像した。なんともグロいのだろう・・・

でも、いつその事全てを捨てるつてのも有りかもしれない。

自殺未遂を考えてからもう二週間も経った。

そんな所に最悪な知らせが来た・・・九州からオレのいとこが来る事になったのだそうだ。しかも期間は夏休みいっぱいまで泊まる部屋はオレの部屋だそうだ・・・（ますます自殺くふりをしにくくなった・・・）

ちなみに、オレのいとこは、オレと同年の女が一人にまだ幼稚園に通っている男が一人。名前は、女の方が優、男の方が祐樹だ。そしてオレの部屋に泊まるのは優の方であつた・・・たとえ力ーテンを引いたりしたとしてもオレと隣り合わせで寝る事になるのは間違いない。親は何を考えているんだ・・・いくら

「ちよつと死ぬのも悪くないかな？」とか思っている人間だろうと中学生というのは男女の危ない関係に興味が生まれ始める時期なんだ！年頃の男と女を一緒の部屋で二人つきりにしていいわけがない。確かにオレに限ってそんな事をするとは思えないが、オレも男だ。優に手を出さないとは限らない！（それに優は結構かわいい・・・

・）

そんな思いもつかのまに、優達はやって来た。最初はおばさん（優達の母）もいたのだが、優達を家におくと、

「帰りは福岡空港行きの飛行機に乘せておいてね！」とだけ言い、チケットを渡しておばさんは帰っていった・・・

「おばさんこんにちはー！たっくんもひっさしぶりー！！元気だった??？」

出し抜けに優が聞いて来た。祐樹は恥ずかしそうに優の後ろに隠

れている。

「ほら！祐樹！ちゃんとおばさんにご挨拶しなさい！」

優が祐樹をグイッと前に突き出した。

「こ…….ここにちは…….」

優とは反対に小さな声で挨拶をする…….

「さ、優ちゃん！荷物の整理でもしてきな！達男！手伝ってあげなさい！！」

はいはい！と適当な返事をし、オレは自分の部屋へと向かった…….

部屋へ入るなり優はオレの机を漁り始めた。

「おい、何してんだよ？」

「え？いや…….この辺にエロ本でもないかな…….って思ってた…….」

は？女がエロ本を探す？なんて趣味だ？…….人間性を疑う。

「ちょ、ちよつと…….！そんな冷たい目で見ないでよ！私はただたっくんの趣味を知りたくて…….それに私、たっくんの事好きなんだ！幼稚園の頃から…….ねえ知ってる？いと同じ土なら結婚出来るんだよ！だから今はその練…….」

オレは最後まで言葉を聞くのが嫌になり、部屋を勢いよく飛び出した。

死んでやる…….オレは優とは結婚できない！オレは優と結ばれていいはずがない！オレは…….優を幸せになんかさせられない…….

この日の夜は家で寝なかった…….友達の家泊めてもらうことにしたのだ。

「そういえば達男、お前野球部の事どうなった…….？」

あれ？なんでこいつがその事を知っているんだ？

「なんで知ってるかって…….それ、達男が教えてくれたんじゃないか！」

そう言っただけはオレからのメールを見せる。

そうだった。オレは父親に怒鳴られた腹いせにこいつにメールを送ったんだった。・・・ま、今となっちゃそんな事どうでもいい事だったが。・・・

「でさ！達男！実はあのメールの内容な、掲示板からパクった文章なんだぜ！クククツ。・・・達男騙されてた？」

だからなんなんだ？別に掲示板からパクったとか関係ないだろ。・

「んだよー！なんか今日の達男ノリ悪いぞ！なんかあったのか？つかなんでオレん家なんかに泊まろうと思ったわけ？」

優達の事を言おうと思ったのだがオレはやめた。

こいつに今、女の話しをするとやばいからだ（実は最近彼女にフラれたらしい。・・・）。

優のヌードを盗撮してきてくれとか頼まれたらたまったもんじゃない（まあ見たくないと言ったら嘘になるが。・・・）。

確かに優はかわいい。

でもそれは表面だけの事なんだ。・・・きっと今頃優は心の中でオレの事を馬鹿にしているんだろう。・・・今日の昼頃の事だって、きっとオレを馬鹿にしてやっただけだろう。

人間、誰だってそうなんだ。・・・どんな人間にだって心は有る。

オレにだって、優にだって、祐樹にだって、俊樹（今、オレが泊まっている友人の名前）にだって。・・・いくら表面でいい子ぶったって所詮心の中は皆自己チューなんだ。オレだってそうだ。自己チューなんだ。・・・人間なんて滅びればいい。皆死んじやえばいいんだ。・・・オレも、優雅も、俊樹も、父親も、母親も、学校の先生だって。・・・皆、死んじやえばいいんだ。そうすれば、誰も苦しまない。

「たつくんはそれでもいいの？」

聞き覚えの有る声が聞こえた。・・・優の声だ。

「ゆ。・・・優？」

「達男？大丈夫か？顔色悪いぞー！てか、ユウって誰よ？？」



俊樹がオレの顔を覗き込む・・・

数分が経ち、オレは幻聴を聞いていた事が分かった。しかし何故優の声だったのだろうか？別に俊樹や、父親の声でもいいはずだが・・・

数分考えた結果、優の声はたまたま聞こえただけの偶然だということにした。

そして又数分が経ち、オレ達は寢床に着いた。

「たつくんは本当にそれでいいの？」

又だ・・・しかも又、優の声で。

「つおー！おい！達男？」

オレは俊樹の声で我に返った。

「お！もしかして達男もとうとうクラスの女に恋したか！」

オレの学校は男子校だ！クラスに女などいない。

「あれ？違った？てか、もしかしてクラスの女の意味分かってない系??」

「分かってない系」

「・・・」

俊樹がオレに冷たい視線を送る。

「つたく、そんなんだから達男はオレしか友達がいなんだよ・・・」

「」

「オ・・・オレにだって友達はあるぞ・・・」

「誰？」

「え・・・えーつと・・・俊樹とか？」

「だからオレ以外にだよ！いないんだろ！」

確かにオレには俊樹以外の友達がいなかった。始めの方は結構オレの周りにはつねに人がいた。しかし部活をサボり始めた瞬間、皆はオレを避け始めた・・・

「お前、今ちよつとでも死にたいって思ってるだろ？」

「・・・」

読まれたのか？

「この様子だと凶星のようだな・・・」

「し、死にたかったらなんなんだよ！お前も一緒に死んでくれんのかよ！」

「いいよ・・・」

「へ？」

「だから達男と一緒に死んでやるって言ってるんだよ！」

「・・・正気か？」

「ああ・・・」

まさか俊樹も死にたいのか？でもオレはどちらかというと自殺じやなくて

「自殺してやるぞー！」っていう事を父親に見せ付けるだけでいいのだが・・・しかしこの機会を利用しない手はない！

「俊樹！本当に一緒に自殺してくれるんだな？」

「おう！しかし一言、これは心中ではないからな！」

「神獣？もしかしてゲームの話してたの？」

「またもや俊樹は冷たい視線を送る・・・」

「達男、ふざけてるのか？」

「オ、オレは別にふざけてなんか・・・」

「ま、そう恐い顔すんなよ！で、決行はいつにする？」

「やばい、もう俊樹は自殺モードだよ・・・」

「な、なあ俊樹！もう一回考え直したらどうだ？オレ達が死んだらきつと悲しむ人があるんだ・・・」

「おい、今になって何言ってるんだ！そんなんだから部活も人間関係も中途半端になるんだよ！」

「オレは元々・・・死ぬ気なんて・・・」

「分かったよ・・・」

「へ？」

「オレだけで死ぬ」

やっぱり、俊樹自身がもうこんな世界に飽きていたんだな・・・俊樹と一緒になら、死んでもいいかもしれない。いや、もう一緒に死

んでやる。

「たつくんなら、止められるよ！今なら間に合う」

「もう何なんだよ！もうオレは死ぬって決めたんだ！」

「ほ、本当に？」

俊樹の顔がオレの目の前に迫る。

「あ、ああ……」

オレがそう言うと、充電をしていたオレの携帯が鳴った……

「ったく、誰だよこんな時間に……」

携帯のディスプレイを見ると非通知の文字が現れた。

「ま、非通知なら出なくてもいいか……」

そんな事をつぶやいていると、やがて携帯は鳴りやみ、代わりに

留守電が入った……

「あ、たつくん？こんばんはー！優でーす！」

優って誰だよって目で俊樹がにらむ……

「たつくん！そしてたつくんのお友達！死んじゃダメだよ！生きて  
ればいい事がきつと有るよ！あと、優に隠し事なんかしてもすぐ分  
かるんだからね！」

俊樹が目を真ん丸にしている。俊樹は驚いているんだ。もちろん  
オレも……

「おい、なんで優って奴は俺達が自殺ムードしようとしてる事知っ  
てるんだ？っーか優って何者なんだよ。達男の携帯にかかってきた  
って事はお前の彼女か何かか？」

「まさか！優はオレのいとこだよ！」

嗚呼、ついに禁断の事を言ってしまった……くそう！こう  
なったら写真でもムービーでもなんでも撮って来てやる！

「そうか……いとか……」

あら？予想していた言葉と全然違うぞ？……いや、でも油断  
は禁物だ！いつ切り替えられるか分からない。

「なあ達男！」

「き、きたあゝゝ！」

「お前いつからオタクになったんだ？」

「へ？」

「・・・・・・」

又々、冷たい視線がオレを射る・・・・・・

「い、いやだからオレは達男が『キター！！』って言ったからそう言っただけで・・・・・・」

「で、俊樹は本当は何が言いたかったんだよ！」

「いや・・・・・・やっぱし自殺なんてやめだ！なんかもう馬鹿らしくなってきた・・・・・・」

「そ・・・・・・そうだな！じゃ、おやすみ・・・・・・」

そしてオレは深い眠りに着いた・・・・・・

朝、すごい形相をした俊樹の母親に揺すり（？）起こされた。

「達男君、うちの俊樹知らない？」

「俊樹が、どうかしましたか？」

「それがねえ・・・・・・」

俊樹の母親の話によると、朝俊樹の母親が起きると玄関にいつも履いていた俊樹の靴が無かったそうだ。初めは散歩にでも出かけたのかと思い、待っていたのだが、数時間経っても帰って来ないものだからオレが何か聞いていないかどうか聞きに来たらしい。

しかし残念ながらオレは何も聞いていない。最後に聞いたのは自殺が馬鹿らしくなったという事だけだ。もしそれが嘘でなければこれは自殺ではない。大丈夫だ・・・・・・しかし、あの言葉が嘘だったら・・・・・・急がなきゃまずい。もう手遅れの場合だってある。

その時オレは第六感ってやつを感じた。

「俊樹・・・・・・」

オレがそう言つと、俊樹の母親は泣き崩れた。

「かあちゃん！腹減った！」

すぐ後ろで声がする。

「飯まだ？」

すると俊樹の母親は立ち上がり、俊樹に向かって歩き出した。

ようやく状況がつかめた俊樹は、

「かぁ・・・か・・・かぁちゃん！朝勝手に出かけたのは悪かったけどオレだってもう中一だぜ！別に心配する事なんてないから！」

あれから、オレは朝飯を御馳走になり、急ぎ足で家に帰った。優に会って昨日の電話の件を問い詰めるために・・・

家に着くとまだ優達は朝飯を食べている途中だった。

「あら！お帰りなさい！・・・達男、何か言う事無いの？」

「????？」

「今日、美濃屋先生から電話がありました・・・何か言う事は？」

美濃屋先生というのは、オレの入っている野球部の顧問のことだ。美濃屋が最近オレが部活に出ない事を言ったのだろうか・・・

「別に言う事なんてねえよ！で、先生何て言ってたの？」

聞きたくもないのに聞いてしまった・・・

「達男、あなた部活サボってない？」

「・・・・・・」

「どうなの？」

「・・・・・・サボってるよ・・・・・・だから、何？」

「・・・・・・」

「何なんだよ・・・・・・」

「どうして・・・・嘘付いてたの？」

・・・・・  
そんなの、部活辞めたらこの家を追い出されるからに決まってる・・・・・

「部活行ってるって嘘付いてた時、どこ行ってたの？」

「図書館・・・・・・」

本当は公園なのだが、嘘を付いた。

オレは嘘つき者だ。きつと自殺をした後行く所は地獄だろうな。  
そこでエンマ様に舌を抜かれるんだ……

「見つかったからって……死んじゃダメだよ！絶対……」  
「!？」

何者なんだ？こいつは……

「エラロイド」

「!？……ああ祐樹か！エラロイドって何だよ」

「わかんない！ただぱつと頭に浮かんだだけ……」

「祐樹……」

何だか優は寂しそうに弟の名前をつぶやいたた。

プルルルルル！

「電話か……」

「はい？……はい、はい、はい……」

「かあさん！どうかしたの？」

オレは暗い顔をしたかあさんに聞いた。

「……」

かあさんは暗い顔をしながら言った。

「俊樹君が……死にました……」

「!？……俊樹が、死んだ！」

「やっぱり……」

「優、お前……」

オレは俊樹が死んだというのにニコニコしている優にいらついた。

「でも、たつくんは死なないでね!……」

優はオレが俊樹の後を追って死ぬとも思っているのだろうか……

・

「優は……」

一体何物何だ？そう聞こうとしたが声が出なかった。

「私は……祐樹と血が繋がっていません……お父さんや、お母さんとも、繋がっていません」

聞いてないのに優は言った。

「優ちゃん、そんな事はないんだよ！おばさんちゃんと優ちゃんが生まれる所見たんだからね！」

そうなのだ。オレと優は同じ日、同じ部屋で、ほぼ同じ時間に生まれたのだそうだ。

「本物の風見 優は……もう死んでいます」

「優が、優じゃない？」

「そう、私は風見 優の……」

「ちよつと待った！」

「？」

オレが待ったをかけたのは、別に何か言いたかったからかけた訳ではないのだが……。なぜかオレはこの続きを聞くのが怖くなった。

「何？たつくん？」

こいつが本当に優では無いのなら、オレはこいつにたつくんなんて言われる筋合いは無い。

「お前は優じゃない……」

「そうだけど……」

「なら、」

「なら？」

「なら……消えろ！」

「！？」

本当はそんな事を言うつもりは無かった……。しかし今までのオレと優の会話だったはずの会話が、オレと知りもしない奴としていたなんてと、思っていたらついあんな言葉を言ってしまった。

「分かった……」

それだけ言うと、こいつはオレの方へつかつかと向かって来た……  
……そして玄関へ……

そしてあいつは死んだ。医者が言うにはノイローゼか何かだそう

だ・・・

俊樹が死に、優まで死んだ・・・しかも自殺・・・俊樹は一酸化炭素中毒で死亡。優はこのマンションから飛び降りて死亡・・・

そしてついにオレは追い込まれた。

部活のサボりが父親にまで伝わったのだ。

別にかあさんが言った訳でも無く、祐樹が言った訳でも無い・・・

それから、あいつが死んだ後、祐樹の母親が向かえに来て、祐樹は九州に帰って行った・・・葬式の予定も無いらしい。

そう、問題は父親なのだ！あのプロジェクトを決行するか？本当に自殺するか？

\*

十二月二十日

ここはオレの家が有るマンションの公園・・・公園のくせに手入れがなく、まるでジャングルの様だ・・・

少し冷えるこの公園で、オレは夜明けの空をながめている・・・

「さっ！行くか・・・」

そんな言葉を呟き、オレは歩き出した。

< END >



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9447c/>

---

ネガティブに行くぜ！

2011年1月23日15時15分発行